

.....

書 評

.....

Werner Beierwaltes: Platonismus und Idealismus.

(Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1972)

熊 田 陽一郎

「様々の保留や変形にも拘わらず、少くもドイツ観念論の時代に至るまでは、そして又、このドイツ観念論の思想全体を通じて、驚くほど一貫した問の連続性がみられる」(本書67頁)

この著作が中世思想研究に対してもつ意味も、正に西欧哲学の問の一貫性というテーマであろう。この「驚くべき連続性」とは、ギリシャ哲学の発端から西欧思想が「運命的に」背負いこんできた、存在と神の同一性の問題、即ち西欧哲学の「存在論的神学的」(Onto-theologisch) 性格に外ならない(8頁)。この一貫せる問題意識は、近代哲学に至ってその先験的主観性(die transzendente Subjektivität)の確立とともに、この主観と神との関わりの問題として、シュリング・ヘーゲルの中心的課題となる。著者がこの書「プラトニズムとイデアリズム」(傍点筆者)において意図したのは、単に両思想の外的形式や個々の結論を抽出してその異同を論じるいわゆる比較哲学史を目指すものではなく、西欧思想全体の連続性を踏まえながら、ドイツ観念論が新プラトン哲学を受容していった歴史を跡づけ、それと同時に、この受容を可能にした両者の「指向的同一性」を明らかにすることによって、両者の問の「解釈学的循環」(hermeneutischer Zirkel)を洗い出すことである(1頁)。

勿論かかる研究は膨大な基礎研究を必要とし、1人の研究者が単独で行うことは至難の業であろう。著者もこれがなお断片的試論であることは自ら認めている。しかしそれにしてもこの試みは、神・哲学史の総合的把握を望む者にとっては貴重な資料となるであろう。著者 Beierwaltes は元々古典学の出身で、新プラトン哲学を専攻領域とする。Würzburg 大学において R. Berlinger 教授のもとで教授資格取得

後、Münster 大学を経て、現在は Freiburg 大学教授として活動中である。教授資格論文は“Proklos” (Frankfurt, 1965) として出版されたが、最近 C. Baeumker 以来のプラトニズム研究論文を集成した“Platonismus in der Philosophie des Mittelalters” (Darmstadt, 1969) を編纂発行した。これは今年の中世哲学会のテーマと関わるものとして注目されよう。何よりも著者は原典に忠実な学者であり、自らの予断を交えずテキスト自身をして語らしめることに心がけているので、本書の如く巨視的立場に立つ研究に適した人物ということができよう。

冒頭論文は、出エジプト記3・14の解釈史である。先ず新プラトン哲学と教父学における神と存在の問題を簡単に要約した後、アウグスチヌス・エックハルト・シェリングの順で、「我はありてあるものなり」の解釈を歴史的に辿る。

アウグスチヌスについては、「詩篇101講解」のテキストが主に検討される。神の年が人間の年と比較され、神のみが過去も未来もなく純粹に「ある」故に、3. 14の神名は、正に神の本質を示す。神の本質は永遠なる自己同一性であり、神が自己を純粹の「ある」として言葉化する所に、三位一体構造が啓示される。こうしてアウグスチヌスの神名解釈は、新プラトン哲学の地平に立ち、ギリシャ的存在論をキリスト教の伝統と総合して中世に伝えるものであるが、ここでは主としてエックハルトへの線が注目される。

それというのも、エックハルトはこの神の自己啓示「我はありてあるものなり」を、存在の自己展開を示す運動として理解し、観念論的神学の根本思想を示すからである。神即ち純粹な存在は、自分自身を思惟する運動を通じて反省的 (reflexiv) に自己を媒介する。この自己省察は神の自己産出 (partuitio sui) であり、三位一体の生命である。神の内的構造を示すこの聖句は、有限なる存在者である人間にとっても、本来の自己の根拠である存在へと駆り立てる挑発 (provocatio) として与えられている。

シェリングはエックハルトの路線に続く。彼が神又は絶対者と名づけるものは、精神としての存在であり、自己省察によって自己を展開する。しかし彼の独自性は、「生成する神」のテーマを明確にしたことである。神又は絶対者は、「存在者そのもの」(das Seyende selbst) と名づけられるが、これは絶対の自由をもってその本質とする (70頁以下)。即ち、自らの存在に対しても非存在に対しても、自由に開か

れている主体である。従って神は自らの存在をも自由に選びとるので、「超存在者」(das Überseyende) といわれる。神はこのように自分自身を省察しながら、自分を完成させてゆくので、「存在者自体」とは、それがあろうとするものであり、又、それがあろうとする所のものである。

それ故シェリングは出エジプト記聖句の解釈に際しても、未来形を採用する(75頁)。「ありてあるもの」とは、「ありてあろうとするもの」である。これこそ神について語られた真の言葉であり、ここに神の最高の自由、自らの存在に対する自由が表現されている。彼は正に、「存在の主」(Herr des Seins)なのである。

こうして「ありてあるもの」の聖句をめぐる解釈史が、哲学史の連続性についての手掛りを与えるが、「ドイツ観念論におけるプロチノス」と題された第二論文は、ノヴァーリス・ゲーテからシェリング・ヘーゲルに至る、プロチノス受容の歴史を論じる。ノヴァーリスは、当時の合理主義的哲學家から顧みられなかったプロチノスを、ドイツ哲学の先蹤として高く評価し、次の世代のプロチノス受容の道を開いたのであった。

シェリングの根本概念たる絶対者は、プロチノスの一者と精神の双方に引当てて検討される。絶対者は端的に一なるもの、根源的なる統一性として、一者に最も近い。しかし自らの中に些かの他者性・関係性を含まぬプロチノスの一者に対して、シェリングの絶対者は自らの中に、すべての対立をすでに止揚した形で含んでいる。即ち、すべての個物を細大洩らさず自らの中に取込み、すべてにおいてすべてであるのがこの絶対者であるが、かかる対立を含む全一性をつくりあげる働きが絶対者の思惟であり、その意味では絶対者はむしろプロチノスの精神と重なり合う。

次に、絶対者と世界との関係、シェリングの創造とプロチノスの善、そしてシェリングの知性的直観とプロチノスの脱我(exstase)についての比較検討が続く。

シェリングと共に、「最も新プラトン派に近い思想構造をもつヘーゲル」については、第三論文「ヘーゲルとプロクロス」において検討されている。ヘーゲルはその「哲学史」のなかで、プロクロスこそギリシャ哲学の終局的到達点を画するものとみなし、更に自らの対的観念論の前段階という評価を与えた。プロクロスの思惟のもつ三一の構造(μονή, πρόοδος, ἐπιστροφή)は、ヘーゲル弁証法の原型である。なぜなら自らを思考する精神が、すべての個物を自己のなかに取込んで具体的

全体性を構築しつつ、自己の絶対性を自覚してゆくのが弁証法的思弁であるから。ただプロクロスが、あくまでヘーゲルの「前段階」として留まる理由は、「自我」即ち、絶対的自由をもつ無限の主観性 (Subjektivität) の概念には、未だ到達していないからである。

しかし著者によれば、この両者の間には遂に止揚することのできない断絶がある。なぜならプロクロスの一者は自らの中に初めから真の充溢を含むのに対して、ヘーゲルの絶対的主観性は、空虚で抽象的一者から始まり、自己省察と自己否定のプロセスを通じて自己を絶対者として充溢せしめるのだから。しかしそれにも拘わらず、両思想のもつ指向的親近性が「解釈学的循環」を生ぜしめ、ヘーゲルの新プラトン哲学理解を根拠づけ、且つ正当化する。けだし思想の作用史に、かかる「誤解」によってその弁証法的力を示すからである。即ちある思想が、位相を異にする他の思想に取込まれ、そこで潜勢力を貯え、「自分自身についてよりも、自らを取込んだその当の思想について、より多くのことを語る」場合があるからである。プロクロスの思惟は、正にこのヘーゲルの誤解によって、ドイツ観念論の本質的契機となったという。

最後の論文は「ドイツ観念論におけるエリウゲナの再発見」と題され、プラトニズムとドイツ観念論を結ぶ中間項のひとつとして、中世における異端者スコトゥス・エリウゲナが浮びあがってくる。考察は思弁・汎神論・救済論の各々について行われる。思弁 (Spekulation) とは、神学哲学をひとつに統一する思惟であり、無媒介的知識たる信仰から、媒介的知識たる哲学へと展開する。「真の哲学に真の宗教である」と述べたエリウゲナは、ドイツ観念論者から思弁哲学の父として評価された。彼の功績は、キリスト教に内含された思弁的要素を、一挙に意識化したことにある。

エリウゲナの汎神論的思考も、ドイツ観念論者からは肯定的に迎えられた。「神はすべてにおいてすべてである」といった表現は、観念論的地平で解釈される可能性をもつ。しかし著者はエリウゲナには神の絶対的超越性と存在の位階性的思想が厳存することを指摘し、一面的な観念的解釈を却ける。

救済論については、エリウゲナが新プラトン哲学から受容した存在の三一的構造を、自然の区分 (divisio naturae) として再構成し、神を能動因即ち目的因として把握したことが、ドイツ観念論における絶対者の自己宥和に通じる思想であることが

指摘されている。

結論として、純粹な観念論的思想はエリウゲナには存在しないが、そのプラトニズム的思考は、観念論的方向に展開し得る萌芽的内容 (Implikation) を蔵しているので、観念論的解釈は可能である。しかし極端な観念論の立場をエリウゲナに読込むことは、避けるべきである。

このように慎重な態度は、上述の論文集 (Platonismus in der Philosophie des Mittelalters) の末尾に置かれた著者自身の論文 “Das Problem des absoluten Selbstbewußtseins bei J. S. Eriugena” (p. 485～516) においても貫かれている。ここで著者は F. C. Baur, Th. Christlieb らの観念論的エリウゲナ解釈を批判する。例えば、「人間における神の自己認識」というエリウゲナの思想は、彼らの観念論的表現によれば、絶対精神たる神が、自己認識のためには、人間という有限的精神の媒介を要するということになる。しかし著者はむしろ、人間のなかに働く神の認識の光が人間の神認識を可能にするという、伝統的立場を守っている。

このように、両書の終結部をエリウゲナ論文がしめくくる形になっているので、彼についての著者の見解を全体的視野へと敷衍してみるならば、次のようなことになるであろうか。

ドイツ観念論は、その「指向的同一性」に基づき、独自にプラトニズムを発見し、これを取込みつつ自己の思惟を展開したように見える。しかし中世思想はその両者を、歴史的にも内容的にも媒介する重要な項として存在している。中世は「解釈」によって、古代とも近代とも結びつく。エリウゲナは偽ディオニシオスを通じてプラトニズムを取込み、巨大な神学的存在論的環流を完結させたが、これはそのまま、中世以降の西欧思想を支配する動的本質構造となる。古代と近代の汎神論は中世の超越神論によって、古代と近代の弁証法的思弁は中世の存在類比的思惟によって、媒介された。一見矛盾するかにみえる各時代の様々の思想にも、「驚くべき問の一貫性」が顕われ、「異った位相の思想に取込まれて、それについてより多くを語る」思想史の弁証法は、ここでも貫徹されてゆくのである。